改正銅版横浜地図 明治 13 年 1 月出版 （下方部分はカット） 横浜市中央図書館所蔵

特集 横浜と水の今昔物語

―開港期の横浜の水事情から日本の近代水道へ―

蛇口をひねれば、水が出る、しかも飲める―今では当たり前ですが、昔は当たり前ではありませんでした。ことに開港後の横浜には、とにかく真水が必要でした。今回は横浜の水事情について、ちょっと詳しくお話ししましょう。

ジャン・ヨコハマ

吉田勘兵衛が萬治年間（1658-1660 年）掘ったと言われる大井戸。水質に優れ、200 年にわたって付近住民の飲料水等に使用されたが、昭和 20（1945）年に進駐軍によって埋められた、と記されている。

江戸時代、吉田新田では

その昔から、「湯水のごとく…」の例えのように日本は良い水に恵まれ、飲料水を簡単に手に入れることのできる国でした。もちろん横浜も湧水や井戸に恵まれていましたが、吉田新田などのように海を干拓したり、沼地を埋め立てた場所は井戸を掘っても塩分を含んだ水しか得られません。例外的に吉田新田の吉田家には良い井戸がありました。たぶん、吉田勘兵衛は水脈があることを最初から知っていてここに屋敷を構えたのでしょう。現在は中区長者町の元あった場所にこの井戸が復元されています。この水を利用できた人は別にして、新田の農民たちはどんな水を飲んでいたのでしょうか？大岡川の川の水を飲んでいたのでしょうか？

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.

現在のワシン坂湧水

現在に残る湧水(山手～打越): ワシン坂湧水、小港一丁目井戸、ビヤザケ井戸、元町厳島神社脇の湧水、打越霊泉、元町水屋敷遺構

開港～明治初期の水事情

●ジェラールの水屋敷

外国船が入港するようになると、船舶への飲料水の供給が必要になります。これに目を付けたジェラールは明治元（1868）年現在の打越に水源を得て給水業を始めます。これは居留地への給水が主だったと考えられています。その後、明治３年までに新たに山手に水源を確保して、本格的に堀川まで配管し、ここから船に積み外国船に販売しました。この水はインド洋まで行っても腐らないと評判になったそうです。水源は現在の元町プールの場所で日本人たちはここを「ジェラールの水屋敷」と呼びました。

ジェラール(Alfred Gerard 1837-1915): フランスでパン職人の息子に生まれたジェラールは横浜に来ると給水業だけでなく、洋瓦や煉瓦の製造業も行い大成功を納めます。帰国した祖国フランスでは悠々自適の老後を送ったそうです。

ジェラール水屋敷地下貯水槽跡(中区元町)

●鉄道開通

明治５（1872）年に日本最初の鉄道が新橋駅－横浜駅(現在の桜木町駅)間に開通すると、蒸気機関車への真水の供給が必要になります。野毛・掃部山山裾の湧水を溜池に集めて、ここから供給しました。現在でも西区花咲町の崖下には湧水が流れ出ています（今年５月放映のＮＨＫブラタモリでもここに潜入しています）。

西区花咲町の掃部山崖下。
手前のバケツに湧水が出ていますが、このお宅の裏奥に深い横井戸があります。

水売り「横浜水道記念館展示より」

●水売りと横浜水道会社

横浜が開港場として発展し人口が急増してくると飲料水の不足が深刻化してきます。関内地区は大部分が沼地を埋め立てて造ったため、元々陸地だった所以外では、井戸を掘っても飲用できる水は得られませんでした。ですから水売りなどという商売が成立します。近郊の農民が湧水などを集めて、いい値段で売りにきたのです。

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.

明治初期の木管水道「横浜水道記念館展示より」

深刻化した水不足を解消するために横浜の財界も対策に乗り出します。当時の錚々たる大商人たち、原善三郎、茂木惣兵衛、高島嘉右衛門、田中平八など 18 名で、多摩川から木管で送水する水道会社を明治６年(1873)に完成させます。ただ、江戸時代からの技術では木管の腐食や中継点の木桶からの漏水などで、結局明治 15（1882）年この会社は潰れてしまいました。特に、コレラなどの伝染病の流行などに対処するには、本格的な近代水道の完成を待たねばなりません。近代水道が完成する前年の明治 19（1886）年には横浜が発生地でコレラが大流行し感染者が 3,000 人を超えました。それほど、横浜の水には危機感がつのっていました。

日本最初の近代水道

野毛山貯水池跡

明治 16（1883）年にイギリス人技師ヘンリー・S・パーマーに水道計画を依頼、パーマーは水源や給水路の調査を行います。明治 18 年にはパーマーを近代水道の工事監督に指名して、工事のすべてを任せ明治 20 年に完成させます。相模川の三井(津久井郡)を取水口に、野毛山まで総距離約 44km を水路や鉄管でつなぎました。三井の取水口は蒸気機関でポンプアップしますが、あとは標高差とサイホンの原理だけで野毛山の頂上まで水を運びました。当時の人は 10 里以上の距離を水が来る訳がないと賭けをした人がいたそうです。

貯水池跡にあるパーマーの胸像

明治 30 年には取水口を更に上流の道志川の青山に移し、取水口から各家庭までいっさいポンプを使わずに自然流下だけで配水するようにしました。動力を必要としないこの方式は、驚くべきことに現在も続いています。野毛山貯水池からは関内地区へ鉄管で圧力のかかった水を配水しました。外国人居留地へは各戸に、日本人町へは共同で使用する共用栓(獅子頭共用栓)が街角に設置されました。

パーマー(Henry Spencer Palmer 1838-1893)： 明治 16（1883）年に来日したイギリス工兵中佐(後に少将に昇進)。横浜水道完成後も横浜港築港計画の工事を指揮したり、大阪、神戸、函館、東京などの水道や各種土木事業の指揮をしました。明治 26 年、築港の工事期間中に 54 歳で亡くなり、青山外国人墓地に埋葬されています。

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.

横浜開港資料館内の獅子頭共用栓

なぜ獅子頭？： 獅子頭共用栓はイギリスから輸入しました。水道完成時は 143 基、最終的には合計 600 基が輸入されました。なぜライオンなのかといいますと、その始まりはエジプトに発します。古代エジプトでは獅子座と満月が重なる季節が雨季の始まりであることからライオンが水の守り神とされていました。これがローマを経由してヨーロッパに広まります。その後共用栓が日本製に切り替わると、水の守護神は龍（＝蛇）ということで蛇体鉄柱式共用栓に変わります。さらに各家庭に水道が配管されるようになると、水の出口は「蛇口（じゃぐち）」と呼ばれるようになりました。

明治 20 年に水道完成を祝い横浜駅(現桜木町駅)に設置された噴水塔「横浜水道記念館展示より」

●近代消防の水源として

近代水道の完成は飲料水の供給の面だけがクローズアップされがちですが、実は消防用の水源としても重要な役割が期待されました。まだ、火事と喧嘩は江戸の華、的な日本人たちにはピンとこなかったかも判りませんが、居留地に住む外国人たちには待望の完成でした。水道スタート時にイギリスから輸入され設置された共用栓が 143 基、消火栓は 629 基でした。これは日本の近代消防の始まりでもありました。

創設当時の消火栓の放水（吉田橋上）横浜市水道局 HP「横浜水道の歴史」より

●近代水道以外でも日本最初―ビール産業発祥、清涼飲料水発祥、これも横浜の水が使われました。

今の横浜の水道はもっとすごい

皆さんは浄水場というと沈殿池が並んだこんな光景を連想されるのではないでしょうか？　いえいえ、もう違うのです。今や最先端の浄水場はとんでもなく進歩しているのです。

それが現在の横浜市水道局川井浄水場です。沈殿池はすべて埋め立てられて広場になっています。平成 26

以前の西谷浄水場「横浜水道記念館展示より」

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.

川井浄水場(セラロッカ)の外観

川井浄水場(セラロッカ)の内部

年４月からはセラミック膜を使ったフィルターによる浄水処理設備に切り替わっています。省スペースで高効率、密閉空間で浄水できることで、さらに安心・安全な浄水場になっています。

当たり前にように、毎日使っている水ですが、いまでは最新鋭機器によって、横浜では安全でおいしい水が供給されるようになっています。といっても、日本でも最近は、飲料水は買って飲むもの、という方向のようですね。でも、基本、水道水は飲めるように生み出されているのですよ。ありがたいことです。

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.